

「同性が好きかも」 誰にもいえず、 悩んでいる人がいます

同性愛者や性同一性障害者はクラスに1〜2人はいますが、
日常の「ホモ」「おかま」「レズ」という言葉に傷ついています。
周りと違う自分に違和感を持ちながらも、
いじめや差別の対象になる不安から、
誰にも相談ができず悩んでいる子どもがいます。

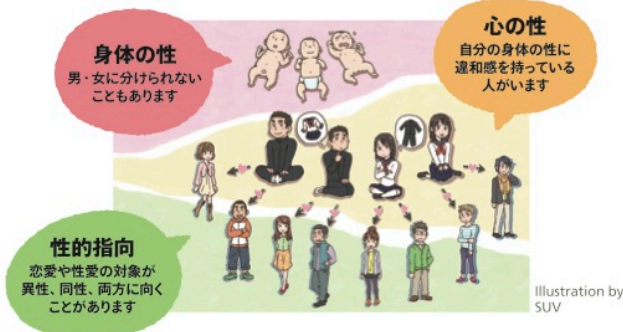


photo by Hiroki Taguchi

1 | 多様なセクシュアリティ(性のあり方)

人のセクシュアリティにはさまざまな形があり、まず身体がどのような性か(女性か男性かどちらでもあるか)に加えて、自分がその性をどう認識しているか(違和感があるかないか)、またどんな人に性的魅力を感じるかなどいろいろ分けられます。自分の身体が女性や男性にわけられなかったり、自分の身体の性別に違和感があったり、同性または両性を好きになったりする人たちは、「性的マイノリティ」と呼ばれています。

今回は、同性あるいは両方の性別を好きになる「同性愛・両性愛」について焦点を絞って説明します。



2 | 同性愛者はどうして見えない?

●異性愛者の中で生きる

多くの同性愛者は、自分の性的指向が知られることによる差別や偏見といった不利益を怖れて一般社会の中で自分自身のことを隠し、異性愛者を装って生活しています。一般的に同性愛者の人口は3~5%、つまり、クラスに1~2人はいると推定されています。その多くは中高生など思春期の時期に、「自分は同性が好きだ」と気がつきますが、周囲には相談できずに一人で抱え込んでいます。こうして社会では、同性愛は身近に存在しないように思われてきました。

●ちょっとした言葉で傷ついている人がいます

同性愛者はテレビのバラエティ番組やマスコミで、話を盛り上げる「ネタ」や「キャラ」として扱われることが多くあります。このことで、同性愛者は、自分が社会の中で異質なものと見られていることや、笑いの対象になるということに気づきます。そしてさらには、自己否定、心理的ストレスを招いてしまう事例も多くあります。

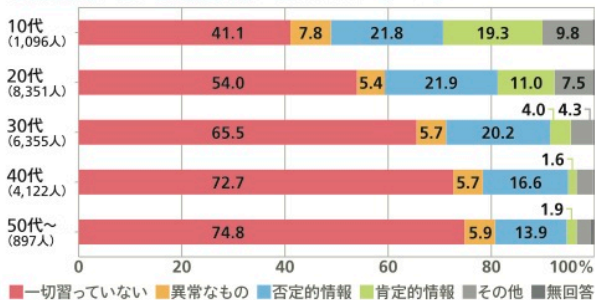
こういった社会では、「自分は同性愛者だ」ということを学校、職場の仲間や家族に伝えるのはとても難しいことです。

3 | 社会における情報不足とゆがんだイメージ

教育現場における同性愛の扱いの調査を見ると、ほとんど何も情報提供されていないか、もしくは否定的な情報が提供されていることがわかります。同時に、学校以外で知られている同性愛者の姿は、ほとんどがバラエティ的なお笑いのネタやキャラになっています。

社会において同性愛者についての情報は不足しているか、ゆがんだ否定的なイメージが流布しているため、同性を好きかもしれないと悩んでいる若年世代に、自己否定的な感情を刷り込んでいくことにつながっていきます。

●教育現場における同性愛の扱い[有効回答数20,829人]*



●体験談(高校生/レズビアン)

中学の保健体育の性感染症授業で、異性間のことしか取り扱わないのを疑問に思って、同性愛者は性感染症にならないんですかと訪ねたことがありました。先生は答えをうやむやにし、「ところで、同性愛って気持ち悪いよね」と言ったのです。まだ同性愛者への差別を意識していなかったため、信頼していた先生からのそんな言葉は、当時中学生だった私にとってショックが大きすぎるものでした。

4 | 同性愛は治るの?

先生に勇気を出して相談したところ「いずれ治るよ」と言われたという話をよく聞きます。このことは同性愛がいずれは治らないといけないものだとされているようで当事者は傷ついています。

同性愛は人間の持つ「性的指向(どの性別に性的魅力を感じるか)」であり、自分の意志で変えたり選んだりできるものではありません。

かつて医学界において同性愛は異常な性欲、性的倒錯といった考え方がされていましたが、1992年にWHOの国際疾病分類(ICD-10)において「同性愛はいかなる意味においても治療の対象とはならない」と見解を発表し、国内では厚生省(現:厚生労働省)が1994年にこれを公式基準として採用しています。

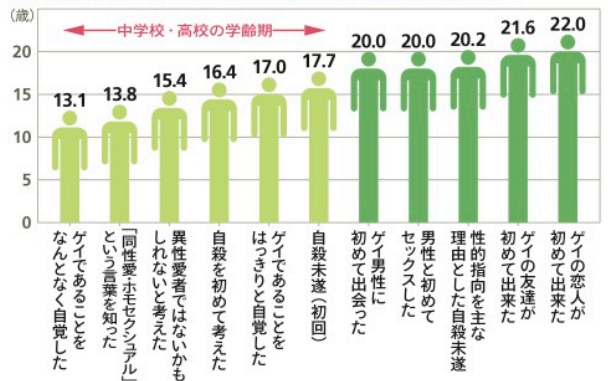
5 | 自分の性的指向に戸惑う思春期

性的マイノリティは、特に中学・高校という思春期に自分の性的指向について、戸惑いや悩みを経験することが多くあります。

たとえばゲイ男性の場合、13.1歳(平均)に「ゲイであることをなんとなく自覚」し始めるにもかかわらず、「ゲイであることをはっきりと自覚」する17.0歳(平均)まで約4年の開きがあります。

自分の力で同性愛についてリアルで具体的な情報を入手しづらい状況では、自分が同性愛であると認識することさえ困難になります。さらに周囲の多くが異性に関心を持つため、同性に性的に魅かれてしまう自分の感情に困惑し、周囲に対して孤独感を強めていってしまいます。

●思春期におけるライフイベント平均年齢[有効回答数1,025人]**



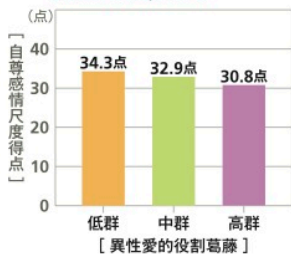
●体験談(大学生/ゲイ)

中学校のとき英会話の授業がきっかけで気になる人ができて、その相手が男の人だったからなんとなく気づきました。でもゲイのイメージがわからず、他人事のような感じでモヤモヤしていました。高1の冬に、ゲイの人が書いたマンガを読んだらすごく楽しくて、男の人が好きでもこんな楽しい人生が送れるんだと思ったとき、自分はゲイとして生きて行こうと自覚しました。

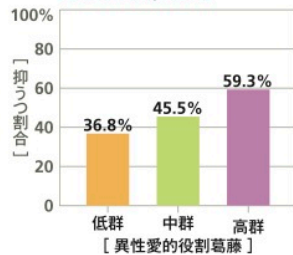
6 | 異性愛者を装うことのしんどさ

日常のなげない会話での、異性愛であることを前提とした「彼女(彼氏)いないの?」という質問や、同性愛をネタにして笑っている雰囲気にあわせなければならない状況など、性的マイノリティはさまざまな場面で心理的葛藤やストレスを感じています。グラフからも異性愛者を装うしんどさ(異性愛的役割葛藤)が強い人ほど自尊感情が低く、抑うつ割合が明らかに高率であることがわかります。

●異性愛者の役割葛藤と自尊感情
[有効回答数6,282人]**



●異性愛者の役割葛藤と抑うつ
[有効回答数6,282人]**



◎異性愛者を扱うしんどさ(異性愛者の役割葛藤)の程度を、低群・中群・高群と三分化しました。その上で、抑うつとの関連を分析したところ、異性愛者の役割葛藤の低群の抑うつ割合は36.8%、中群は45.5%、高群は59.3%であり、異性愛者の役割葛藤が強い人ほど抑うつ割合が明らかに高率であることが示されました。

●14%が自殺未遂の経験

過去の調査で「ホモ・おかま」といった言葉のいじめの被害があるゲイ・バイセクシュアル男性は59.6%に上り、これまでに自殺を考えたことがある割合は65.9%、実際に自殺未遂をした割合は14.0%であることがわかっています。

●性的指向と自殺未遂経験

男性においては、性的指向が自殺未遂に関連する要因であることが明らかになっており、異性愛でない人の自殺未遂リスクは異性愛者の約6倍であることが近畿圏の若者を対象とした街頭調査の結果として示されています。

●自殺未遂経験に関連する要因【男性】(ロジスティック回帰分析)***



●HIV感染者の増加

一般社会の偏見や差別が自尊感情の低下につながっており、このことが成人後の性行動に大きく影響し、男性同性間でHIV感染者が増加している要因のひとつとも考えられています。

2011年のHIV/AIDS報告数は1,529人で、そのうち約64%が男性同性間によるものでした。

7 | 自分を伝え、自分と向き合う カミングアウト

自分が性的マイノリティであることを告白する行為を「カミングアウト」と言います。自分の気持ちが整理できてカミングアウトをする人もいますが、家族や信頼している人を傷つけたり拒否されたりするのではないかと心配してカミングアウトできずにいる人も多くいます。その人の考えや状況によっては必ずしもカミングアウトするのが良いとは限りませんが、本人がしたいのにできない状況はストレスの多いものです。相手が親しく大切な存在であるほど、結果を不安に思うことも多く、ゲイ男性で家族にカミングアウトしている割合は約1割にしかならず。

カミングアウトされたとき!

子どもからカミングアウトされたときは、話してくれたことを受け止め、

「よく話してくれたね、ありがとう」

と伝えてください。

●親へのカミングアウト
[有効回答数19,884人]



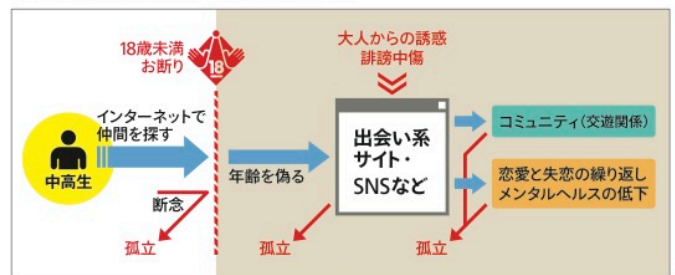
8 | 自分の居場所を求めてコミュニティへ

同性愛者は、同じ思いを共有できる仲間たちを求めて、雑誌やインターネットを通じてコミュニティを作っています。一般社会の偏見や差別にとらわれない仲間同士のコミュニティは、同性愛者にとって大切な居場所です。

「一歩街に出ると、異性愛前提の一般社会」といった環境の中で、ほとんどの人が、同性愛者によるコミュニティと、そうでない一般社会とを行き来しながら生活しています。また、こうしたコミュニティは限られた一部の空間であり、誰もがアクセスできるものではありません。夜の遅い時間など、外出の難しい時間に行われるイベントには参加できない人、また、こうしたコミュニティの存在すら知り得ない環境にいる人が多くいます。

さらに言えば、参加するコミュニティが、その人のニーズにあったものであるとは限りません。インターネット、携帯電話の普及により、幅広い情報の収集が可能となった現代でも、そこで見つけたコミュニティが自分の居場所となるかはわかりません。自分の気持ちを打ち明けたい一心で、誰にもばれないようにこっそりと出かけてたどり着く場所が、安全な場所である保障はありません。

●中高生の出会いと交友関係の現状



携帯電話からインターネットへアクセスし、「ゲイ」などのキーワードで検索すると、出会い系サイトや成人向けサイトが数多く表示されます。サイトの利用者の多くは大人ですが、中高生が年齢を偽って利用することもあります。見ず知らずの人と会うこと自体が危険な上に、仮に交友関係を持たたとしても、日常になじまない関係のため、そのつながりは脆弱になりがちです。また、普段交流を持たない年齢層の人とのかわりに恐怖を感じ、かえって自信をなくしてしまうこともあります。

9 | コミュニティで発見できる自分

自分と同じような立場や年齢の性的マイノリティの人と直接話すことによって、自分では気がつかなかった自分を発見することもあります。例えば、同性愛であることを受け入れるまでの体験談や、性のあり方に関して、同性愛に限らず、さまざまな考えを持った人の話を聞くことを通して、より鮮明に自分の望む性のあり方を思い描くことができます。このような自分探しのきっかけとして、コミュニティセンターは重要な役割を果たすのです。

●体験談(大学院生/ゲイ)

性的マイノリティのコミュニティに参加し始めたときのこと。性的マイノリティの友達ができた以外のことは何も変わらない毎日でしたが、心の中では、全く違う世界のように思えました。人とは違うことに怯えることはない、自分はこのままでいいと、いつでも誰かが認めてくれるような気がしたからです。特別何かをしてくれなくてもいい。ただ、ありのままの自分を受け入れてくれる、そんな環境が大切なんだと、今は思います。

*出典: REACH Online 2014

**出典: 日高庸晴(2000) ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者の役割葛藤と精神的健康に関する研究, 思春期学18巻3号, 264-272, 日本思春期学会

Hidaka Y, Operario D(2006) Attempted suicide, psychological health and exposure to harassment among Japanese homosexual, bisexual or other men questioning their sexual orientation recruited via the Internet. Journal of Epidemiology and Community Health, 60, 962-967

日高庸晴ほか(2008) REACH Online 2007結果報告, <http://www.gay-report.jp/2007/>

日高庸晴ほか(2004) SPIRITS@Wave 2結果報告, <http://www.gay-report.jp/2003/>

***出典: Hidaka Y, Operario D, Takenaka M, Omori S, Ichikawa S and Shirasaka T(2008) Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan.

Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology, 43,752-757

わが国における都会の若者の自殺未遂経験割合とその関連要因に関する研究 <http://www.health-issue.jp/suicide/>

10 「SHIPにじいろキャビン」とは？

性的マイノリティのためのコミュニティスペースです。性的マイノリティの人たちが周囲の目を気にせず、学校帰り、仕事帰り、買い物帰りに気軽に立ち寄りおしゃべりをしたり、インターネットを利用したり、本を読んだり、お茶を飲んだりしてリラックスできるスペースです。性的マイノリティに理解のある方なら、セクシュアリティや年齢に関係なくご利用いただけます。



●生きるバトンをつなぐ

現在のスタッフの中には、悩み孤立していた人もいます。それがキャビンの利用者となり、コミュニティの中でさまざまな人とつながることで徐々に自己肯定感を得られるようになり、今ではスタッフとして新たに孤立しているかもしれない人に呼びかけていく、そんな生きるためのバトンリレーが実現されています。

●SHIPで何ができるの？

SHIPにはいろいろな機能があり使い方は自由です。それぞれの目的に応じてゆっくりとお過ごしください。

■ 情報を得る

◎図書コーナー

性的マイノリティに関する書籍が200冊以上取りそろえてあります。

◎インフォメーションコーナー

全国のコミュニティ関連のイベント情報から、HIV/AIDSなどの性感染症にかかわるものまでさまざまな情報がそろっています。

■ 話をする

キャビンにはさまざまな人がきています。気のあった人とお茶をしながら話をするができます。

■ たずねる

友だちの作り方から、HIV・性感染症に関することまで分からないことがありましたら、キャビンアテンダント(スタッフ)におたずねください。

■ 同じ仲間との出会い

同じ仲間が集えるよう、セクシュアリティや年代別にさまざまなイベントを毎月開催しています。

SHIPは、「SHIPにじいろキャビン」の他に、次の支援も行なっています。

カウンセリング・相談

SHIPでは専門のカウンセラーによるカウンセリングや、病気やセックスに関する相談にも応じています(予約制、一般は有料、中高生は無料)。カウンセリングは「SHIPにじいろキャビン」にお問い合わせください。

性感染症検査

HIV・梅毒・B型肝炎の性感染症検査を無料で受けることができます(予約制)。

11 ポジティブな環境づくり

子どもの自尊心を高めるために大切なことは、セクシュアリティを理解し尊重することです。そのため、常日頃からセクシュアリティの多様性について認識を深め、性的マイノリティに対する偏見のないメッセージを児童・生徒に伝えることが大切です。

図書室や保健室等に性的マイノリティに関する本を置いたり、ポスターを貼るだけでも当事者である子どもにとっては貴重な情報獲得の機会になります。また、性的マイノリティをからかう「ホモ」「オカマ」「レス」「おねえ」といった差別的な言葉を授業で取り上げることも大切です。

【差別的な言葉】

「ホモ・レス・オカマ・オナベ」は侮蔑的な言葉です。省略しなければ侮蔑語になりません。

ホモ → ホモセクシュアル(同性愛)

レス → レズビアン(女性同性愛者)



書籍を置く



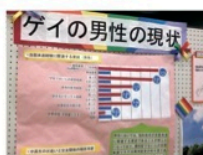
ポスターを貼る



●学校や生徒の取り組み

神奈川県内の高校ではいろいろな科目の授業の中で当事者と話をするグループワークを行ったり、高校生が夏休み期間中に同性愛について調べ、そのことを文化祭で発表する取り組みが始まっています。

身近に感じる事が理解への第一歩です。SHIPでは当事者のゲストスピーカーの派遣や、調査研究のための情報提供などのお手伝いを行っています。



12 親の思い、親への対応

●親の思い

保護者は自分の子どもが性的マイノリティであるということを知った時に、ショックを受け、子どもの主張を拒否したり、自分の育て方が悪かったのではないかと自分を責めてしまうことがあります。また、親はショックを受けても、その気持ちや事実を他の人に話さずに孤立してしまう場合もあります。

●親への対応

子どもが性的マイノリティであると知った時に、親がショックや喪失感、将来への不安などが強い場合には、そうした気持ちを安心して話したり、受け止める相手や場所の存在が必要となってきます。本人、親、それぞれの思いや葛藤、そして受容までのプロセスを、周囲が受け止めていくことが重要です。

SHIPでは、親同士で悩みを共有できる「かぞくの会」を奇数月に開催しています。

13 教育・行政関係者の方々へ

SHIPでは学校の先生方や相談機関の方からの相談にも応じています。お困りのことがありましたら、電話またはメールでご連絡ください。また、学校・行政機関等への出張研修を承っていますのでお問い合わせください。

[電話相談]

SHIP・ほっとライン

性的マイノリティ本人や、その家族などのための電話相談
誰でも安心して話ができる。

毎週木曜19:00~21:00

☎ 045-548-3980

[総合案内・問い合わせ]

SHIPにじいろキャビン

横浜市神奈川区台町7-2 ハイツ横浜713 info@ship-web.com

開館時間 ●水・金・土曜16:00~21:00 / 日曜14:00~18:00

SHIPにじいろキャビンは、特定非営利活動法人SHIPが運営しています。

☎ 045-306-6769 http://www2.ship-web.com

